

# いきいきと働くために

私たちは人生の大部分の時間を仕事や家事など、働くことに費やしています。そのため毎日楽しくいきいきと働けるかどうか、より充実した人生を送るための鍵であると言えるでしょう。

今月は、鈴木さんに届いた一通の手紙を通して、いきいきと働くための秘訣を探ってみます。



# 「いつも配達 ありがとうございます」

「ただいまー」

ここは東京都内のマンションの一室。  
午後七時過ぎ、鈴木宏さん（36歳）が、勤  
め先から戻ってきました。

「おかえりなさい！」

妻の真由美さん（33歳）と健太くん（5  
歳）が、玄関までお出迎えです。

「きょう、あなた宛に、とつてもすてきな  
お手紙が届いていたわよ」

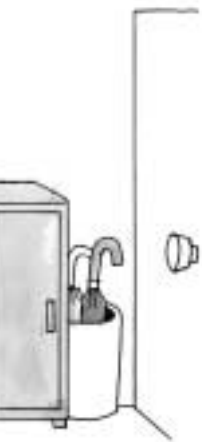
「すてきなお手紙？ おいおい真由美、  
中を開けて読んだのか」

「違うわよ。開けるわけじゃないじゃない  
の」

「はい、パパ。これだよ」

健太くんの手には、一通の白い封筒が  
握られていました。

宏さんが受け取った手紙の差出人欄に  
は、「愛知県名古屋市中……」と書かれた住  
所と「高山隆夫」という名前が書かれて  
います。裏返すと切手の下に赤のボール  
ペンで、「いつも配達ありがとうございますま  
す」という言葉が綴られていました。宏



さんは、そこでようやく“すてきな手紙”の意味が理解できました。

「ほら、あなた。すてきなお手紙でしょう。でも、配達してくれた方、ちゃんと気づいてくれたかしら」

「そりや気づいたと思うよ。手紙を届けるには、必ず宛名を確認するはずだから」

「きつと、うれしかったでしょうね」

「もちろんさ」

宏さんの勤務先での主な仕事は、昼食用のお弁当を会社や病院などに配達することです。そのため、「いつも配達ありがとうございます」という感謝の言葉は、まるで自分が言われたように思えて、宏さんはなおさら、うれしい気持ちになったのでした。



# 周りを温かい気持ちに させる人

「いただきますーす」

鈴木家の夕食の団らんが始まりました。宏さんは言いました。

「『いつも配達ありがとうございます』  
か。さりげなく書けるなんて、さすが高山さんだな」

すると真由美さんが尋ねます。

「その高山さんって、どんな人なの？」

「うん、僕がいつも弁当を配達する工場の警備員さんだったんだ。先月で辞められたけれど。大手企業を定年退職した後のお勤めだったんだけど、いつもさわやかな笑顔で挨拶してくれて、とつても親

切な人なんだ」

「親切って？」

「うん。弁当を運ぶのを手伝ってくれたり、この間だつて急に雨が降ってきたとき、雨にぬれながら一生懸命に僕を手伝ってくれてね……。それに時間があれば、弁当箱だつてきれいに洗っておいてくれたりしてね」

「えっ、お弁当箱まで洗ってくださるの？」

「そうなんだ。高山さんの心配りには頭が下がるよ。高山さんのような人がいるかと思えば、食べ終わった弁当箱を灰皿



代わりにしたり、裏口うらぐちの地べたにそのまま放置ほうちしている会社なんかもあるんだよ。いくら仕事だと言ったって、こっちだって嫌いやになるよ」

その後、食事をしながら、宏さんは真由美さんに、高山さんとの工場での出来事を話し始めました。



それは一か月前、宏さんがお弁当を配達したときのことです。いつものように高山さんが、お弁当を食堂まで運ぶのを手伝ってくれました。その途中、突然、高山さんが鈴木さんに切り出しました。「実は鈴木さん、私、明日でこの仕事、辞めることになったんですよ」

「えっ、ほんとうですか!」

「はい。娘夫婦むすめ夫婦が一緒いっしょに住もうと言って



くれて、名古屋に引越すんですよ。鈴木さんにはお世話になりましたね」

「いや、世話になったのはこちらのほうです。高山さんがいなくなるなんて、寂しくなるなあ……」

次の日、宏さんはパートで購入したハンカチを持って、高山さんたち警備員が休憩している部屋を訪ねました。そこで宏さんは驚きました。狭い部屋の中には、工場の人たちや出入りの関係者からと思われる高山さんへのたくさんの贈り物や花束が、ところ狭しと置かれていたからです。

「高山さんって、多くの方から慕われていたんですね……。これ、私からの、ほんの気持ちです」

宏さんは高山さんにハンカチの包みを渡しました。

「鈴木さん、お気づかいいただいて、すみませんね。私、これまで元気に働けて、毎日が楽しくて楽しくて、それだけでとても幸せだったんですよ」

「前から思っていたんですが、高山さんは、どうしてそんなに明るいきいきと働けるんですか。私なんか、仕事で嫌なことがあると、すぐ同僚や家族に当たり散らすことがあるんですよ。高山さんは、いつでも周りの人たちを温かい気持ちにさせる人なんですけどね……」

「そんなふうに言われると照れくさいのですが……。実は、ちよつとしたきつかけがあつたんですよ。話すと長くなるから、こんど手紙を書きますよ」

「ええ、ぜひお願いします」

高山さんはうれしそうに、メモ用紙と鉛筆を鈴木さんに渡しました。鈴木さんは自宅の住所を書き終えると、「高山さん、お休みに気をつけてください。失礼します」と言つて、その場を離れたのでした。



# 働くとは 「はたをらぶくごもるハイム」

夕食が一段落したところ、宏さんと真由美さんは、高山さんの手紙を読みました。手紙には、まずお礼が書かれていて、続いて引越しの片付けが終わったことや、娘夫婦や孫に囲まれた楽しい暮らしぶりが綴られていました。

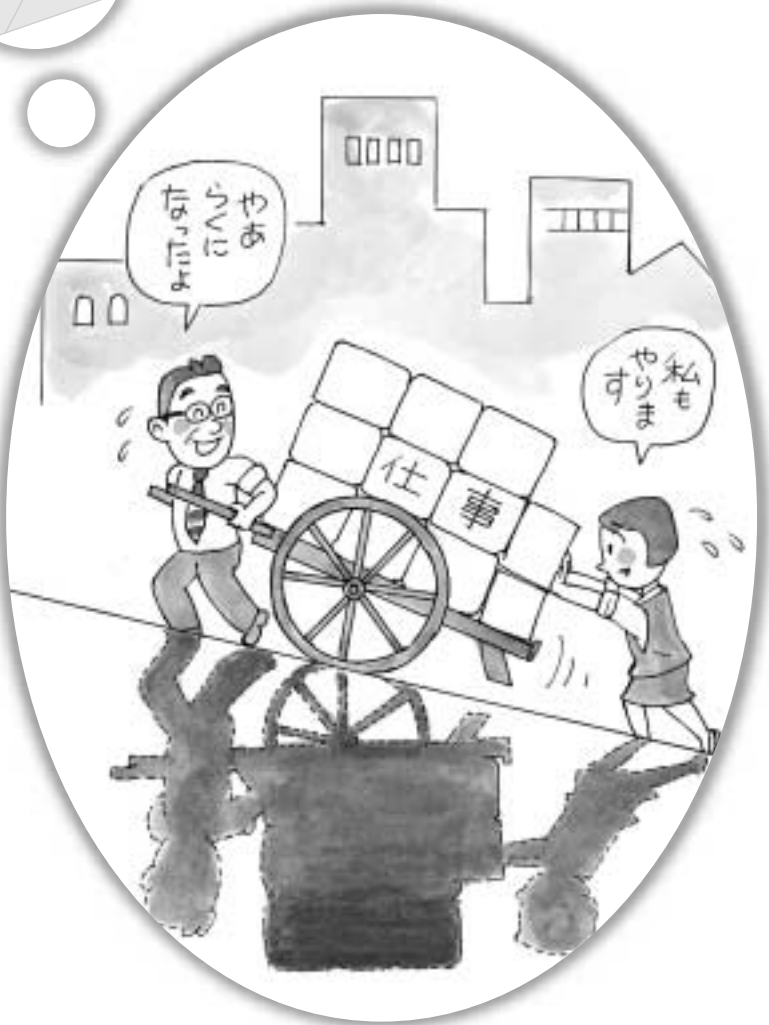
そして、次のような文面が続いていました。

……さて、この間、鈴木さんから尋ねられたことですが、私も以前勤めていた会社で、ある人に同じような質問をしたことがあるのです。

新しい部署に異動となり、仕事が思うようにいかず、かなり苦しんでいたときです。その職場に二十代の女性がいきました。彼女は、雑用のような仕事でも「私がやります！」と元気な声を出して、はつらつと仕事をしているのです。そんな姿を見て、不思議に思っただ私は、鈴木さんが私に尋ねたように、彼女に質問してみました。するとその女性から次のような言葉が返ってきました。

「みんなのために仕事をすると、とても気持ちがよく、役に立っていると実





感できません。それに、どんな仕事でも、だれかを助けることになると思います。だから私は何をするにしても、一つ一つの仕事の意味を考えるようにしています。この仕事をしたら、今度はだれが喜んでくれるのだろうかと思ふのです」

彼女の話を聞いたとき、自分の考え方とずいぶん違うことに驚きました。そして、私も彼女のような気持ちで働きたいと思ったのです。それまではお金のため、生活のため、「給料は我慢料だ」と割り切って働いていましたが、「よし、これからは人に役立つ仕事をしよう、人に喜ばれるように仕事をしよう」と一大決心したのです。

この世の中には、雑務や雑用という仕事

はないのです。雑な気持ちでするから雑用になるのです。どんな仕事も心を込めれば光輝く仕事になると思うのです。

鈴木さんの質問に答えられたか分かりませんが、私のつたない体験談を書かせていただきました……

そして手紙の最後には、次の言葉が添えられていました。

「働くってのはね、はたをらくにしてやることさ——山本有三著『路傍の石』より」

手紙を読み終えると、宏さんが切り出しました。

「高山さんも昔はいろいろあつたようだなあ。それにしても、傍の人を楽にするから働くか、なんか語呂合わせみたいだ

けど、いい言葉だね」

「心のこもった手紙だし、この女性もすてきね。傍の人って、身近な人ってことでしょ。私も時々、健太の世話や家事に追われて、あなたや健太にあたりたりするけれど、この女性を見習いたいわ」

「そうだな。僕も仕事で嫌なことがあると、『我慢、我慢。我慢がすべて』って自分に言い聞かせることもあったけれども、高山さんの言うとおり、心を込めて働くことの大切さを忘れちゃいけないんだ」

これまで働くことの意味をあまり深く考えてこなかった宏さんと真由美さんでしたが、高山さんからの手紙をきっかけに、その意味をあらためて見つけ出すことができたようです。



# 仕事は相手がいて成り立つ

一般に、会社などで社員がいきいきと働くためには、次のような条件が必要であると言われています。

- ① 職場環境が整っていて快適なこと。
- ② 個人の能力が発揮できる適材適所の人材配置がなされていること。
- ③ 給与や待遇面での公平性が確保されていること。

④ やる気が高まる目標管理制度や報酬制度が整っていること。

⑤ いきいきと働くことができる明るい社風が醸成されていること。

社員がいきいきと働ける条件はさまざま

まあるでしょうが、これらは経営者に多くの責任があるとも言えるでしょう。もちろん、これらも大切な条件には違いありません。しかし、たとえどんなに恵まれた環境が整っていても、結局、働く人自身が、目の前の仕事に対して、どのような心で取り組むか、その姿勢いかによって、仕事は楽しくもなれば、つまらないものにもなるのです。

そもそも、私たちは何のために働くのでしょうか。会社のため、お金のため、家族のため、プライドや充実感を満たすため、世のため人のためなど、働く理由



はさまぎまです。働く理由や意味は、人それぞれ千差万別ですが、ただ一つ言えることは、仕事は、相手があつて初めて成り立つということです。自分一人だけでは決して成り立たないのです。

このことについて夏目漱石（一八六七～一九一六）は次のように述べています。

「己のためにするとか人のためにするとかいう見地からして職業（仕事）を観察すると、職業というものは要するに人のためにするものだというところに、どうしても根本義を置かなければなりません。人のためにする結果が己のためになるのだから、元はどうしても他人本位である」

（「道楽と職業」より）

また、鎌倉初期の禅僧である道元（一一二〇～一二五三）の教えをまとめた『修証

『義』の中に、「利他を先とせば自らが利省はぶかれぬべしと、爾しかには非あらざるなり。利行りぎょうは一法いっぽうなり、普あまねく自他じたを利するなり」とあります。

この道元の教えを分かりやすく言うと次のようになります。

多くの人は、他人の利益を優先させることで、自分の利益が減ってしまうと考えます。ところが、そうではなく、「他

人のため」と「自分のため」を分けて考えることに誤りがあり、人々に利益を与える利行は、利行を行う本人にとつても利行なのです。利行は自分と他人をも利するのです。

つまり、夏目漱石も道元も、まず人に役立つこと、他人本位に考えて働くことが、結局は自分自身のためになるのだということを教えているわけです。

## いきいきと働ける社会に

働くということは、周囲の人々を喜ばせ、人々を支え社会の役に立つことです。また、見方を変えれば、私たちは他

の人々の働きによって、支えられているのです。そのように考えると、私たちは働くことよって、互いに支え支えられて

いるとも言えます。さらに突き詰めて考えると、働くことは、社会の恩に報いるという意味も生まれてくるでしょう。

他人や社会の役に立っていると感じて、社会の恩に対する感謝の心が感じられたとき、私たちは喜びとともにより深い充実感を得ます。私たちが日々、いきいきと働けるための秘訣は、「自分が周りの人の役に立っている」ということを心から実感し、感謝の心が生まれることにあります。

そして、みずからの働きが、人々に役

立っていると最も実感できるとき、それは相手から「ありがとう」という感謝の言葉をかけられたときです。

高山さんの手紙の表書きに「いつも配達ありがとうございます」と書かれているように、私たちも日々の暮らしの中で周りの人々に対して、「ありがとう」「ごころうさま」という感謝やねぎらいの言葉をできるだけ多く伝えたいものです。そうすることで、みんながいきいきと働ける、そんな明るく潤いある社会が築かれていくのではないのでしょうか。

